

NEW



holbein

ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

油絵具を使って絵画を描きたいのに、換気がちゃんとできないというだけの理由で諦めていた人がいる。石油系の溶剤に対するアレルギーも以前から根深い問題だった。ホルベイン油絵具「デュオ」、それは油絵具でしながら水溶性。より安全な油絵具としてこれまで愛用されてきた大きな理由だ。でもデュオの特徴はそれだけではない。唯一のアーティストレベル、という評価を得たほどの、本格志向。他の絵具と混合させたり、塗り重ねることによって多彩な表現技法を可能にする。また今回のリニューアルによって、新たに顔料から見直した全100色。プロユースという言葉を、いま自信を持って贈りたいと思う。

水で描ける——次世代油絵具
アクアオイルカラー「デュオ」

画家は、ある意味、無防備であった。





尹熙倉

土と、ともに在る人との、
広がりの対話

倉林靖一文

Text by Yasushi Kurabayashi



IN SITU Torrington Place 1997 レンガ
ロンドンでのインスタレーション

I997

「自分のつくったものが作品として見えるのは、
美術という文脈があるから。その外に置いても作品として
成立するものかどうか、試してみたんです」



文化庁在外研修を終えて帰国後、97年に再び渡英。3か月間の滞在中、工場でレンガを焼き、街のなかに風景を
パロディするようにインスタレーションした

尹熙倉は陶による立体を制作してきた作家だが、2000年前後から平面作品も手がけるようになつた。現在、大学では工芸科で教鞭を執るが、「画家」と呼ぶのに、違和感はないはずだ。というのも、この作家にとって、技法的にも、背後にある考え方についても、立体と平面のあいだに本質的な違いはない。共通しているのは、例えば、作品が見据えている時間の、スパンの長さである。ベニヤのパネルに和紙を貼り、溶いた膠を塗って層をつづっていく。そこに焼成した粘土を碎いて粉にしたもののを載せる。自ら「陶粉画」と名付けたこの手法によって、時間の流れを超えた悠久性が、作品に加わっている。陶板に粉で絵を描き、それをもう一回窯で焼く、という方法をとることもある。「屋外でも褪色しない」ので、野外や半野外に設置される作品に使われる。尹の関心が平面へと移るターニングポイントとなつたのは、立体



東京オペラシティ・アートギャラリー収蔵品展「ブラック&ホワイト—寺田コレクションにみる形と線」(2000)での展示風景

2000

「絵を描こうとして材料を考えたときに、『変化しない』ことが私の基準でした。
自分で焼いた
陶粉は化学変化しないので
300年は持つはず」

岐阜市にあるギャラリー CAPTIONで行った個展で、周辺の古い木造の家並みに立体作品を置いた。何にも閉まれていな
い、何も保護してくれない街中でも、それが「作品に見えるだろうか」ということを知りたかった。

「街中では作品としての保障どころか、壊されてしまうこともあります。美術館の展示ではそれがすでに棚上げされている。そんな美術という営みについて、あらためて考えたんです。『何だろう』といふところから始まって、小学生や高校生、お年寄りなどの住民が様々な反応してくれた。その人々

作品を展示する際の空間への関わり方であり、作品を画廊や美術館だけではなく、居住空間、公共空間、屋外でも展示してみることだった。この面で重要なふたつのプロジェクトがある。

ひとつは1993年、



マンションの中庭に設置された立体作品《そこにあるもの》(東京・市ヶ谷、2004年)
Courtesy Gallery Koyanagi

もうひとつプロジェクトは、1997年にイギリスのレンガ工場で行ったものである。その前年、文化庁在外研修員としてロンドンに滞在したときにレンガの素材としての面白さに気づいた。一度帰国し、97年に再渡英して行ったのは、展覧会としてではなく、レンガ工場でつくった作品をレンガ

の知識や経験に基づいて、作品との関係をより開いていくべきだといふんです。作品を作ったらしめるもの、および作品と人の関係性が、美術館や画廊の外でも存在することの自覚が、刻み込まれた。

もうひとつのプロジェクトは、1997年にイギリスのレンガ工場で行ったものである。その前年、文化庁在外研修員としてロンドンに滞在したときにレンガの素材としての面白さに気づいた。一度帰国し、97年に再渡英して行ったのは、展覧会としてではなく、レンガ工場でつくった作品をレンガ

2008

「陶粉は膠液に溶いて画面に載せると、微かに動いていきます。
その動きにうまく手を貸すように描けると、
描き始める前のイメージ以上のものができあがるのです」



何か 2008 陶粉、パネル 40×40cm Photo Kenji Morita

造りの街並みに短時間設置し、写真に収めたゲリラ的な展示だった。「作品をそつと置いてくる関わりしかできない。設置してもどこまでが作品かわからない」という状況で、作品と「場との関わり」を確かめたかった。イギリスにおけるレンガとは、近代の産業や社会の歴史そのものを背負っている素材である。「社会や現実に身を寄せていくって、四角いものをつくること」から何かを見出そうとすることだつた。

こうした「場所と関わる」試行の延長線上で、尹の心に、「建築」とからみたい」という気持ちが生まれてくる。建築家たちを訪ねて対話を重ねていくうちに、例えば柏木浩一設計の兵庫大学内で、あるいはいずれも当代随一の住宅作家、中村好文が改修設計した家や堀部安嗣の集合住宅などへの作品設置へと結実する。そのなかで陶の作品を平面として壁に設置するということが増えた。

もともと立体作品用のドローイングも描いていたし、絵を描くことは好きだった。焼物の粉を木に塗つて遊ぶところから始まつた試みは、難しい絵画理論とは無縁に「とにかく『絵』は楽しい」という気分で持続して様々な成果をもたらした。2000年、ギャラリー小柳での個展は、初めて平面作品のみによる展示となつた。

尹が短期の展覧会だけでなく、建築や公共空間に関わるバーマメントなものにもこだわるのは、作品とそれを見る人との対話が、長い時間のなかで醸成され、見る人



日本デザインコミッティー主催「庭師たちの肖像 Vol.1 魂の表面—Spiritual Surface」(松屋銀座デザインギャラリー—1953、2008、企画=新見隆) 展示風景



アトリエ「スタジオ・ユン」周囲には武蔵野特有の、腐葉土を探るために雜木林が迫る。その根元に、尹の陶の立体作品が苔むして無造作に散らばっていた

Photo Kenji Morita



自身の気づきのなかで、持続する強い印象として刻み込まれるのを望んでいるからだ。「例えば、家が建ち3年経つたある日、住んでいた人が、これ作品だったんだと初めて気づくようなことがあれば面白いですよね」。土とその焼成についての深い知識に裏付けられたながら、作品は、ものとの深い対話こそが、人間の豊かな生をもたらすことを示している。「今は食品でもそですが、元の素材が何でできているか見えない時代になっている。つまり、自分が何に即して生きているのかわからなくなっている。そこ触ると楽しいのに。それをアート作品のなかで伝えられたら、と思います」。

在日韓国人として生まれ、ずっと日本名を使っていた。大学院に進むとき、本来の韓国名を名乗ることにしたが、歐文綴りがわからなくて大韓航空に問い合わせたのだと、笑いながら振り返った。尹の人柄の、どこか拘泥のない、風

通しのいい広がりを持つた、しなやかでしかも強い存在感は、作品にもある。彼が頻繁に使う作品タイトルである「そこに在るもの」という素朴かつ矜持も備えた言葉が、その性格をよく物語っている。深いケヤキ林のなかにぽつんと建つ簡素なアトリエが、すでに時間を超えた不思議な空気をまとつていて、いつまでも見守りたい。アトリエ「そこにあるもの」

●くらばやし・やすし
美術評論家
2008年12月25日 埼玉・三芳町の「ス

タジオ・ユン」にて
2008年12月25日 埼玉・三芳町の「ス

タジオ・ユン」にて
2008年12月25日 埼玉・三芳町の「ス

1963年兵庫生まれ。多摩美術大学美術学部工芸学科准教授。86年東京造形大学造形学部デザイン学科卒業。88年多摩美術大学大学院美術研究科修了。95年文化庁芸術家在外派遣研修でイギリスに1年間滞在後、97年にはラボロウ美術大学(レスシャー、イギリス)陶芸科およびレンガ工場で3ヶ月滞在制作。主な個展に93年ギャラリーCAPTION(岐阜、95.2000.04年)、97年「そこにあるもの」静岡県立美術館、00年ギャラリー小柳(東京、02年)ほか。グループ展では02年光州ビエンナーレ(韓国)、04年「アルス・ノーヴァ—現代美術と工芸のはざみ」(東京都現代美術館)ほかに出品。コミッショニングワークに、複合ビル「アピターレ玉川田園調布」(東京)設計・堀部安嗣建築設計事務所)ほか。著書に『美術史の余白に—工芸・アルス・現代美術』(共著)ほか。静岡県立美術館で「余白の美—李禹煥、尹熙倉、イ・フル」展が2月17日～3月29日に開催。9月4日～10月4日にはギャラリーCAPTIONで個展が予定されている。